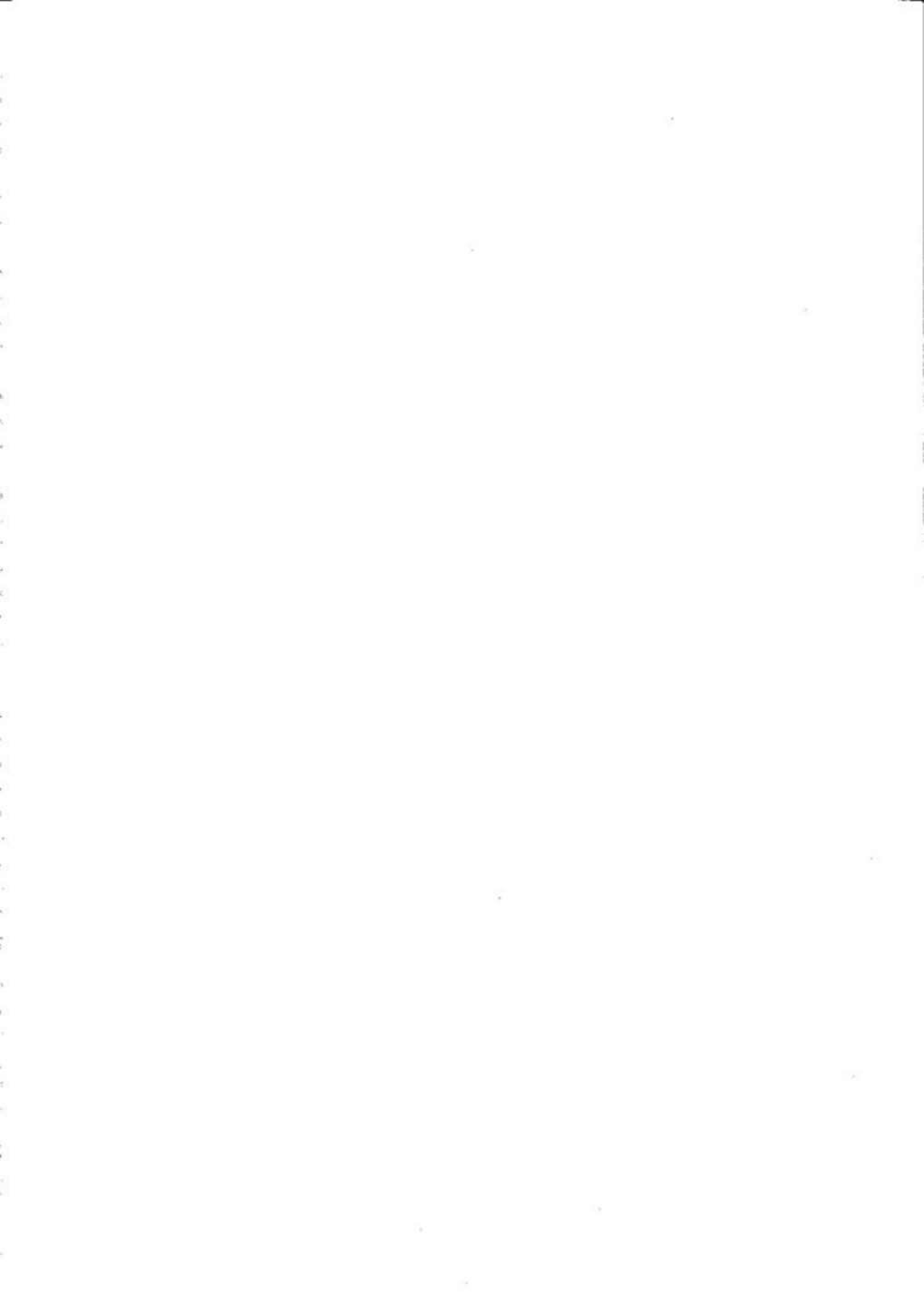


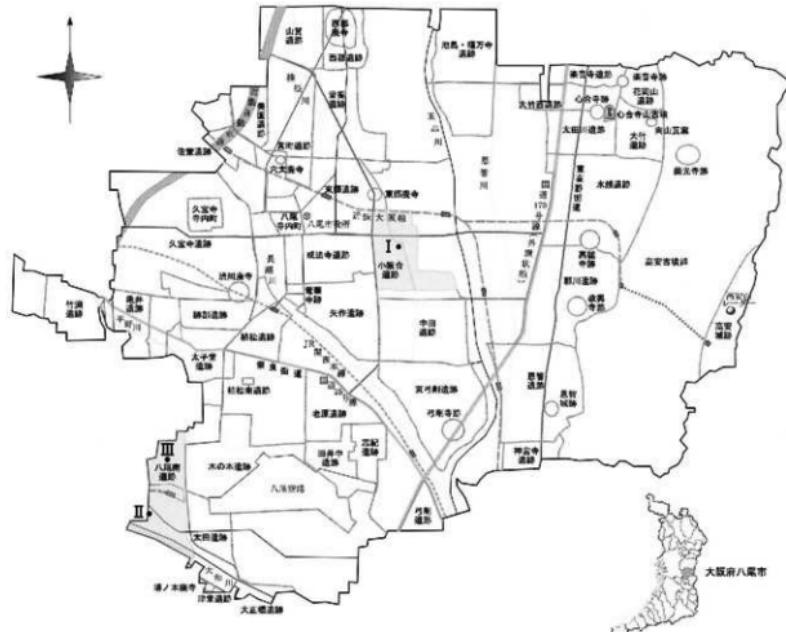
- I 小阪合遺跡（第43次調査）
- II 八尾南遺跡（第32次調査）
- III 八尾南遺跡（第33次調査）

2010年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



I 小阪合遺跡（第43次調査）  
II 八尾南遺跡（第32次調査）  
III 八尾南遺跡（第33次調査）



2010年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

## はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。八尾市は古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く存在しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

本書は、平成21年度に行いました公共事業に伴う発掘調査の成果を収録したものであります。

小阪合遺跡第43次調査では中世頃に埋没した自然河川を確認しました。八尾南遺跡第32次調査では、旧石器時代から古墳時代中期にわたる地層や遺構を、また第33次調査では、古墳時代中期～平安時代の集落域を確認しました。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 西浦昭夫

# 序

1. 本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が平成21年度に実施した、公共事業に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成22年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、Ⅰ坪田真一、Ⅱ成海佳子、Ⅲ西村公助で、全体の構成・編集は坪田が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（平成8年7月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』（平成19年度版）をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
1. 本書で用いた方位は磁北あるいは座標北(国土地標第VI系〔世界測地系〕)を示している。
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。  
土師器・瓦器-白、須恵器・陶磁器-黒
1. 土色については「新版標準土色帖」1997年後期版 農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

# 目 次

## はしがき

## 序

I 小阪合遺跡第43次調査(K S 2009-43).....	1
II 八尾南遺跡第32次調査(Y S 2009-32).....	7
III 八尾南遺跡第33次調査(Y S 2009-33).....	19

報告書抄録

I 小阪合遺跡第43次調査(K S 2009-43)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南小阪合町一丁目61番地で、防火水槽築造工事に伴い実施した小阪合遺跡第43次調査(K S 2009-43)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成21年10月1日に着手し、10月9日に終了した(現場実働4日)。調査面積は約50m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査には、梶本潤二・芝崎和美・田島宣子・永井律子・中浜輝志・西出一樹の参加を得た。
1. 内業整理は現地調査終了後に着手して平成22年3月をもって終了した。  
　　遺物実測－永井  
　　遺物トレース－市森千恵子
1. 本書の執筆・編集は坪田が行った。

## 本　文　目　次

1. はじめに.....	1
2. 調査概要.....	2
1) 調査方法と経過.....	2
2) 基本層序.....	2
3) 検出遺構と出土遺物.....	3
3.まとめ.....	4

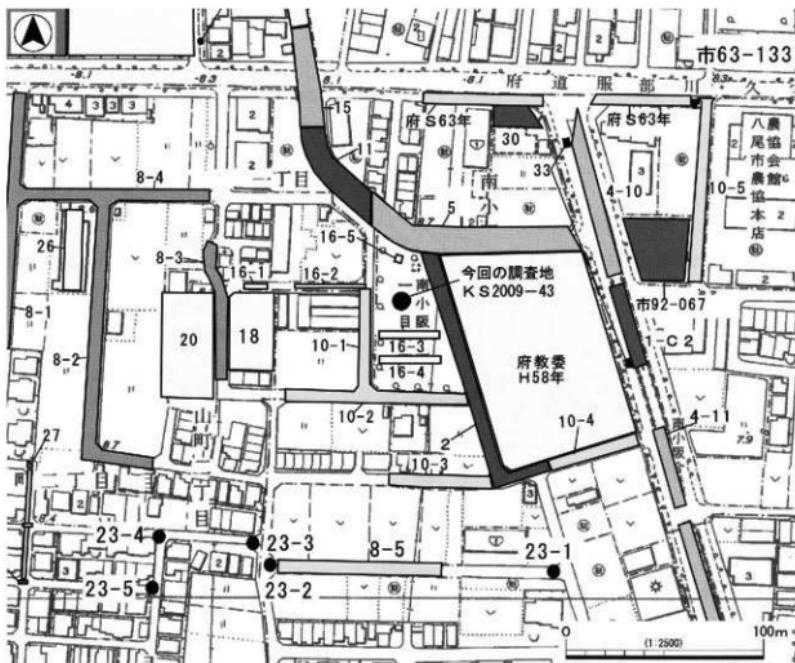
# I 小阪合遺跡第43次調査(K S 2009-43)

## 1. はじめに

小阪合遺跡は八尾市のはば中央に位置し、現在の行政区画では小阪合町1・2丁目、南小阪合町1・2・4丁目、青山町1~5丁目、若草町、山本町南7~8丁目がその範囲にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置し、同地形上で東郷遺跡・成法寺遺跡・矢作遺跡・中田遺跡と接している。

当遺跡内では昭和57年以降、土地区画整理事業等に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期から近世に至る遺跡であることが確認されている。

今回の調査地である南小阪合公園は、遺跡範囲の北東に位置している。同敷地内においては、当調査研究会が昭和63年度に公園造成に伴う第16次調査(第3~5調査区)を実施している他、周辺道路部分についても第2次・第10次調査を実施しており、古墳時代初頭~近世の遺構・遺物が確認されている。



第1図 調査地位置図

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

今回の調査は、八尾市南小阪合町一丁目61番地に所在する南小阪合公園内で実施される防火水槽築造工事に伴う調査で、当調査研究会が小阪合遺跡内で行った第43次調査(KS2009-43)である。

調査区平面形は直径約9.0mを測る円形を成し、面積は約50m<sup>2</sup>を測る。調査面積は当初35m<sup>2</sup>の予定であったが、工事の都合により上幅を大きくして掘削した。

調査は、掘削方法の都合によりまず北東半分について実施し(北区)、完了後、南西半分(南区)を実施した。

調査は、現地表下約1.6mまでを機械掘削とし、以下約1.3mについて人力・機械掘削により実施した。

調査で使用した標高の基準は、調査地北西部道路上に位置する四級基準点相当の八尾市街区多角補助点(1A176: T.P.+8.865)を使用した。方位は工事設計図に準じた。

### 2) 基本層序

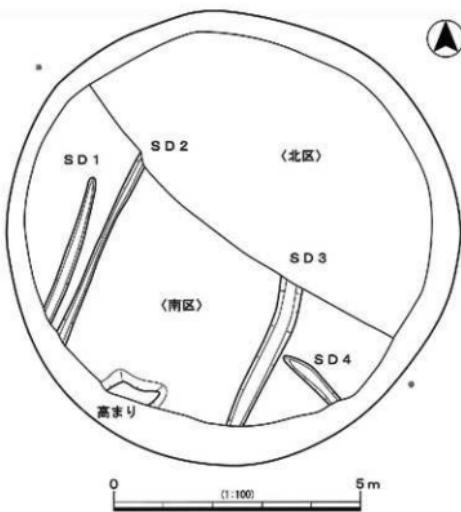
0層は盛土、1層は旧耕土である。2・3層は搅拌の著しい作土で、時期は近世であろう。2層からは近世陶磁器や瓦器片が出土した。4~7層はFe斑が顕著に見られ、ブロック状を成し淘汰不良の作土である。土師器・須恵器・瓦器・常滑焼・平瓦等が出土した。8層以下のシルト~砂の互層は河川堆積である。土師器・須恵器・瓦器・古式土師器・弥生土器等が出土した。

### 3) 検出遺構と出土遺物

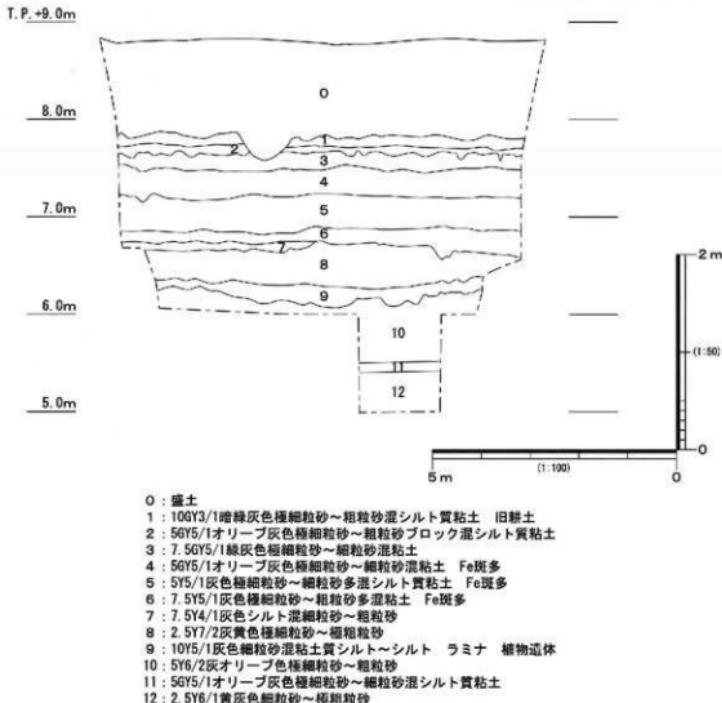
6・7層下面(約T.P.+6.7m前後)で北東~南西方向の溝3条(SD1



第2図 調査区位置図



第3図 平面図

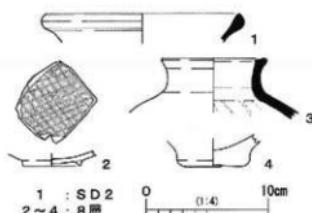


第4図 断面図

～3)、北西～南東方向の溝1条(SD 4)、を検出した。規模は幅15～45cm・深さ5～15cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土はSD 1・2が7層、SD 3・4が6層である。耕作関連の溝であろう。また南端では高まりが見られたが、畦畔の可能性がある。

遺物はSD 2から中国製白磁碗(1)、SD 3から土師器・瓦器、SD 4から土師器・須恵器が出土した。1は12世紀に比定されるものである。やや歪みが認められる。

河川堆積である8層出土遺物のうち2～4を図化した。2は瓦器碗で、見込みの暗文は格子状で、先行する調整はハケを施す。また見込みに重ね焼き時の高台痕が認められる。12世紀後半に比定される。3は須恵器口縁部で、横瓶あるいは提瓶と考えられる。4は弥生土器の底部で、後期に比定される。3・4は磨耗が著しい。



第5図 出土遺物

### 3. まとめ

今回の調査では約 T.P.+6.7 m以下で中世頃に埋没する自然河川(8層以下)を検出した。この河川は南で実施した第16次調査第3調査区河川4に相当する。埋没後、当地は生産域となっており、耕作関連と考えられる南北方向に平行する溝が検出された。以降も居住域を示すような遺構は認められず、生産域としての土地利用が近世まで続いていることが判明した。

#### 註

- 註1 高萩千秋 1990 「小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－（昭和61年度第8次・昭和62年度第10・13次・昭和63年度第16次調査報告） 財団法人八尾市文化財調査研究会報告 26」（財）八尾市文化財調査研究会





1



2



3



4

出土遺物

## II 八尾南遺跡第32次調査(Y S 2009-32)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市若林町三丁目地内若林第一公園内で、防火水槽築造工事に伴い実施した八尾南遺跡第32次調査(Y S 2009-32)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 成海佳子が担当した。
1. 現地調査は、平成21年9月10日に着手し、10月1日に終了した(外業実働11日)。調査面積は約50m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査には、飯塚直世・市森千恵子・芝崎和美・竹田貴子・中浜輝志の参加を得た。
1. 内業整理は現地調査終了後隨時着手し、平成21年12月25日に終了した。
1. 内業整理には、上記のほか村井俊子-遺物実測・トレースが参加した。
1. 本書の執筆・編集は成海が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめ	7
2.調査概要	9
1) 調査方法と経過	9
2) 基本層序	10
3) 検出遺構と出土遺物	11
3.まとめ	12

## II 八尾南遺跡第32次調査(Y S 2009-32)

### 1. はじめに

八尾南遺跡は八尾市南西端部に位置する後期旧石器時代以降の遺跡である。その範囲は東西約0.5km・南北約1.3kmにおよび、現在の行政区画では、西木の本一～四丁目・木本・若林町一～三丁目にあたり、市域を挟んだ北～西側は大阪市長原遺跡に接している。地理的には、南から伸びる河内台地の北端に位置しているため、遺跡南部と北部では、様相が異なっている。南部では台地の影響が色濃く、比較的浅い部分で後期旧石器～縄文～弥生時代前期の遺構・遺物が検出されているが、北部では低湿地の状況が顕著に表れている。遺跡の東には、南に太田遺跡、北に木の本遺跡が接しているが、太田遺跡東部は当遺跡南部に、木の本遺跡は当遺跡北部に共通した状況にある。西～北には長原遺跡(大阪市)が接しているが、ここでも同様の立地条件が見られる。また、新大和川を挟んだ南側には、八尾市・藤井寺市・松原市にまたがる津堂遺跡などがあり、さらに南東部の古市古墳群へと遺跡群が連なっている。

当遺跡発見の経緯は、昭和48(1973)年、長原遺跡が地下鉄工事中に発見されたことに端を発し、遺跡が八尾市域にも連続することが予測できたため、長原遺跡調査会による試掘調査が行われたことによる。その後、地下鉄谷町線八尾南駅駅舎を対象に八尾南遺跡調査会による発掘調査が行われ、さらに周辺の開発に伴う調査が断続的に行われてきている。

今回の調査地は、遺跡推定範囲のはば南部西端に位置しており、調査地西側は市域境界となっている。調査地の北～東には八尾市教育委員会調査地(第1図-17)が接しており、周辺には当調査研究会調査地(1～14)、大阪府教育委員会調査地(15)、(財)大阪文化財センター調査地(16)、八尾市教育委員会調査地(18)が位置し、西側には(財)大阪市文化財協会調査地(19～40)が点在している。(第1図・第1表参照)



第1図 調査地周辺地図

第1表 周辺の調査地一覧

※番号は地図・文献と共通

番号	遺跡名	調査機関・略号	主な検出遺構・出土遺物
1		YS82-1	弥生～古墳：墓域、平安～鎌倉：居住域
2		YS86-5	弥生：生產域、古墳：居住域
3	(財)八尾市文化財調査研究会	YS87-8	弥生～古墳墓域 居住域
4		YS87-9	弥生：生產域、古墳：？
5		YS88-12	古墳：墓域
6		YS89-14	古墳：居住域？、鎌倉：生產域
7		YS89-15	繩文：？居住域？、弥生：河道
8		YS90-17	弥生：居住域
9		YS94-20	弥生：古墳：？
10		YS94-21	弥生～古墳：居住域
11		YS95-23	弥生：居住域、中世～近世：生產域
12		YS95-24	弥生～古墳：？
13		YS99-25	弥生、古墳、奈良以降：居住域？、古墳：埴輪
14		YS2007-29	古墳：古墳埴丘、埴輪
15		大阪府教育委員会	旧石器
16		(財)大阪文化財センター	弥生：生產域、居住域、古墳：墓域
17		八尾市教育委員会	—
18		*	弥生～古墳：居住域？
19	(財)大阪市文化財協会	NG82-20・41	旧石器、弥生、古墳、飛鳥：牛座城、居住域、墓域
20		NG93-56	古墳：集落
21		NG90-5	
22		NG88-60・91・12	旧石器
23		NG88-15②	古墳、鎌倉：生產域、居住域
24		NG90-62	
25		NG88-69	繩文、弥生、飛鳥、鎌倉：墓域、居住域、生產域
26		NG88-1	弥生：墓域
27		NG88-29・37	後期旧石器、鎌倉：自然河川、生產域
28		NG88-22	
29		NG87-60	後期旧石器、繩文、弥生、古墳：生產域、居住域
30		NG85-13・42	後期旧石器、繩文、弥生、古墳、平安、鎌倉：居住域、生產域、墓域
31		NG88-43	後期旧石器、繩文、古墳：奈良：生產域、居住域
32		NG93-1	後期旧石器、繩文、弥生、古墳：生產域、居住域
33		NG88-22③	弥生、鎌倉：生產域
34		NG88-4	旧石器、弥生、古墳：牛座城、居住域
35		NG91-29	—
36		NG88-84	旧石器、繩文、弥生：自然河川、牛座城、居住域
37		NG88-15	
38		NG94-83	旧石器、古墳、飛鳥、奈良：居住域
39		NG92-63	中世：牛座城
40		NG89-37	

## 文 献

- 駒沢敦 1984「3.八尾南遺跡(第1次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告5』
- 駒沢敦 1988「7.八尾南遺跡(第5次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告16』
- 原田昌則 1995「I.八尾南遺跡(第8次調査)」「八尾南遺跡」『(財)八尾市文化財調査研究会報告47』
- 駒沢敦 1988「10-11.八尾南遺跡(第9次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告16』
- 原田昌則 1995「II.八尾南遺跡(第12次調査)」「八尾南遺跡」『(財)八尾市文化財調査研究会報告47』
- 高萩千秋 1989「5.八尾南遺跡(第14次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告28』
- 青木勘時 1989「6.八尾南遺跡(第15次調査)」「同上」
- 原田昌則 1995「III.八尾南遺跡(第17次調査)」「八尾南遺跡」『(財)八尾市文化財調査研究会報告47』
- 高萩千秋 1995「29.八尾南遺跡(第20次調査)」「平成6年度八尾市文化財調査研究会事業報告」
- 坪田真一 1998「VI.八尾南遺跡(第21次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告61」
- 岡田清一 1999「IV.八尾南遺跡(第23次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告63」
- 高萩千秋 1996「謹.八尾南遺跡(第24次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告54」
- 高萩千秋 2000「25.八尾南遺跡(第25次調査)」「平成11年度八尾市文化財調査研究会事業報告」
- 成海佳子 2007「八尾南遺跡」『(財)八尾市文化財調査研究会報告111』以上(財)八尾市文化財調査研究会
- 樋田英人 1989「八尾南遺跡-旧石器出土第3地点-」大阪府教育委員会

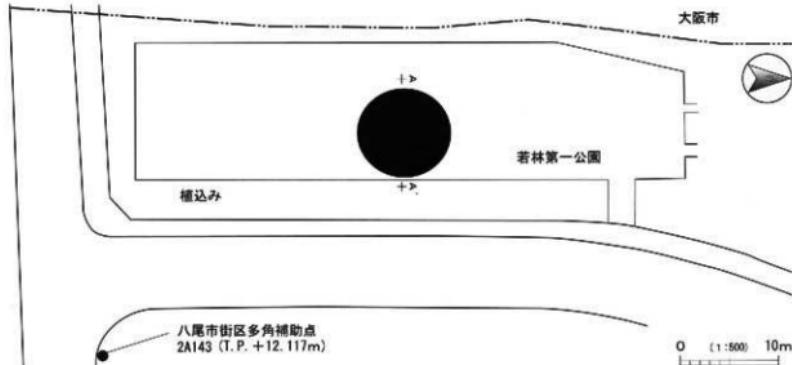
## II 八尾南遺跡第32次調査(YS 2009-32)

- 17 米田敏幸 1981「八尾南遺跡範囲確認調査」「八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要」八尾市文化財調査報告6  
18 米田敏幸 1985「4.八尾南遺跡の調査」「八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書」八尾市文化財調査報告11  
以上八尾市教育委員会
- 19・29・34・36 1999「長原遺跡発掘調査報告VⅡ」  
20・38 2006「長原遺跡発掘調査報告XⅤ」  
21 1997「長原・瓜破遺跡発掘調査報告X」  
22・35 1997「長原・瓜破遺跡発掘調査報告XⅠ」  
23・25~27・33 1995「長原・瓜破遺跡発掘調査報告VⅢ」  
28 1997「長原・瓜破遺跡発掘調査報告IX」  
30 1993「長原・瓜破遺跡発掘調査報告V」・1995「長原・瓜破遺跡発掘調査報告VI」  
31・32 2006「長原遺跡発掘調査報告XⅤ」  
以上(財)大阪市文化財協会

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

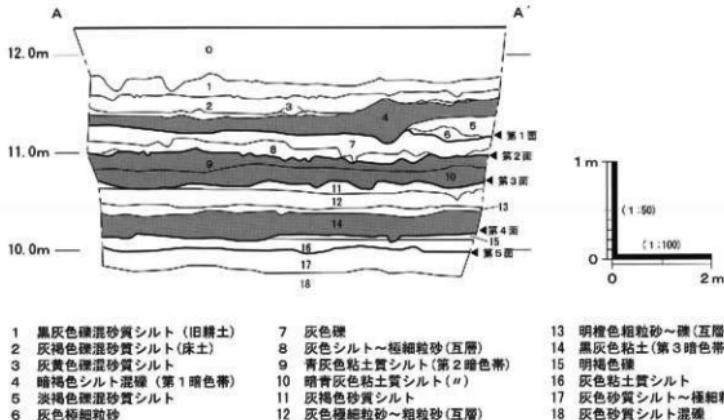
今回の調査は、研究会が八尾南遺跡内で行った第32次調査にあたる。調査原因は、若林第一公園内に防火水槽を築造するもので、掘削範囲は径約8mの円形、面積は約50m<sup>2</sup>である。調査面積は、工事の都合により当初予定の35m<sup>2</sup>を上回っている。調査区の周囲には遊具や植え込みがあり、余地がなかったため、調査区を南北に分割して調査を実施した。掘削方法は、現地表下0.8m前後までの盛土・旧耕土・床土(0~2層)を機械掘削とし、3層以下18層上面までの1.7~1.8m間を機械・人力掘削を併用した。地層の観察は、南北を掘削しながら中央部の壁面で行った。その結果、第1面~第5面までの5枚の遺構面を確認した。高さの基準は調査区南東35m地点の八尾市街区多角補助点(2A143:T.P.+12.117m)を使用した。



第2図 調査区設定図

## 2) 基本層序

- 第0層：盛土。上下2枚に分かれる。上部は公園造成時、下部は旧耕土の埋め立てに伴う。層厚0.5～0.6m、現地表面の標高は12.3m程度である。
- 第1層：黒灰色礫混砂質シルト、層厚0.2m前後、上面の標高は11.7m前後である。
- 第2層：灰褐色礫混砂質シルト、層厚0.1～0.2m。
- 第3層：灰黄色礫混砂質シルト、層厚0～0.2m、南では薄く、北へ厚くなる。
- 第4層：暗褐色シルト混疊、層厚0.1～0.4m、長原7層(第1暗色帶)に対応する地層で、長原・八尾南両遺跡で指標となる地層である。調査区南西の19・34・36調査地ではこの層上面で飛鳥時代の遺構を、層内で弥生時代後期～古墳時代後期の遺構を検出している。また、北東の3調査地では同時期の遺物が出土している。
- 第5層：淡褐色礫混砂質シルト、層厚0～0.3m、調査区東部に堆積する。
- 第6層：灰色極細粒砂、層厚0～0.2m、5層同様調査区東部に堆積する。5・6層にはラミナが見られるところから、河川内埋土の可能性がある。
- 第7層：灰色礫、層厚0.1～0.2m、この層上面が第1面で、溝・小穴等の遺構を検出した。上面の標高は11.2～11.3mである。
- 第8層：灰色シルト～極細粒砂の互層、層厚0.2～0.3m。
- 第9層：青灰色粘土質シルト、層厚0.1～0.3m、長原9層(第2暗色帶上部)に対応する地層である。この層上面が第2面で、畦畔状の遺構が検出されたことから水田作土の可能性がある。2・3・7調査地では、弥生時代前期の水田が検出されている。上面の標高は11m前後である。
- 第10層：暗青灰色粘土質シルト、層厚0.1～0.3m、長原9層(第2暗色帶下部)に対応する地層である。北東の7調査地ではこの層上面で縄文時代後期の住居が検出されている。



第3図 断面図

- 第11層：灰褐色砂質シルト、層厚0.2m前後、この層上面で溝・小穴を検出した。上面の標高は10.6m前後である。
- 第12層：灰色極細粒砂～粗粒砂の互層、層厚0.2m前後
- 第13層：明橙色粗粒砂～礫の互層、層厚0.1m前後、
- 第14層：黒灰色粘土(第3暗色帶)、層厚0.3m前後、長原12A層に対応する。この層上面から切り込む河川を検出した。また、19・35・36調査地でも、流路が検出されている。
- 第15層：明褐色礫、層厚0～0.1m前後、調査区東部にのみ見られる。この層上面で溝・土坑・小穴等を検出した。上面の標高は10.1～10.2m前後である。
- 第16層：灰色粘土質シルト、層厚0.1m前後、長原13A層に対応する。
- 第17層：灰色砂質シルト～極細粒砂、層厚0.4m前後、この層上面でサヌカイト剥片を検出した。上面の標高は10m前後、長原13B層に対応する。
- 第18層：灰色砂質シルト混礫、層厚未確認、長原14層に対応するものと考えられる。

### 3) 検出遺構と出土遺物

#### 第1面

第7層灰色礫上面で土坑2基(SK 101・102)、小穴17個(SP 103～119)、溝3条(SD 120～122)、落込み1か所を検出した。小穴には柱痕の見られるものもあったが、建物等を復元するには至らなかった。このうち、SK 103・SP 119から土師器の小片がわずかに出土している。

#### 第2面

第9層青灰色粘土質シルト上面で、水田畦畔の可能性のある高まりを検出した。畦畔201は幅1m以上、高さ0.1m程度が遺存しており、畦畔202とともにほぼ南北に伸びる。畦畔203～205は部分的に検出いただけである。

#### 第3面

第11層灰褐色砂質シルト上面で小穴2個(SP 301・302)、溝2条(SD 303・304)を検出した。SD 304から土器の小片(第4図-1)が出土している。突堤部分のみが遺存する小片であるが、縄文土器の可能性が高い。

#### 第4面

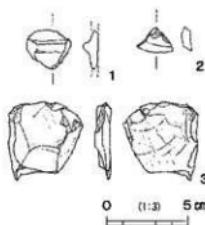
第14層黒灰色粘土上面から切り込む河川(NR 401)を検出した。流路方向はおおむね南東から北西で、内部には粗粒砂・植物遺体の互層が堆積している。

#### 第5面

第15層明褐色礫上面で土坑2基(SK 501・502)、小穴3個(SP 503～505)、溝3条(SD 506～508)を検出した。第15層は溝SD 506を境にその南東側に堆積しており、その上面で土坑SK 501・502や小穴SP 503～505、溝SD 508が検出された。

#### 第6面

第17層灰色砂質シルト～極細粒砂上面では、遺構の検出はなかったが、サヌカイト剥片が2点(第4図-2・3)出土した。



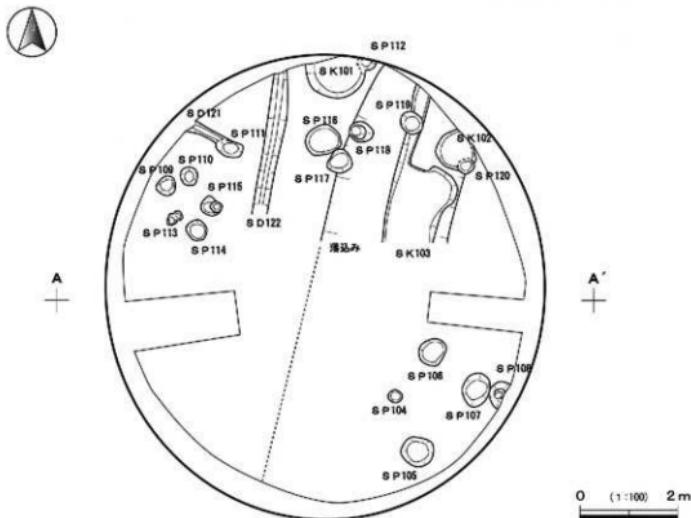
第4図 出土遺物実測図

第2表 検出遺構一覧表

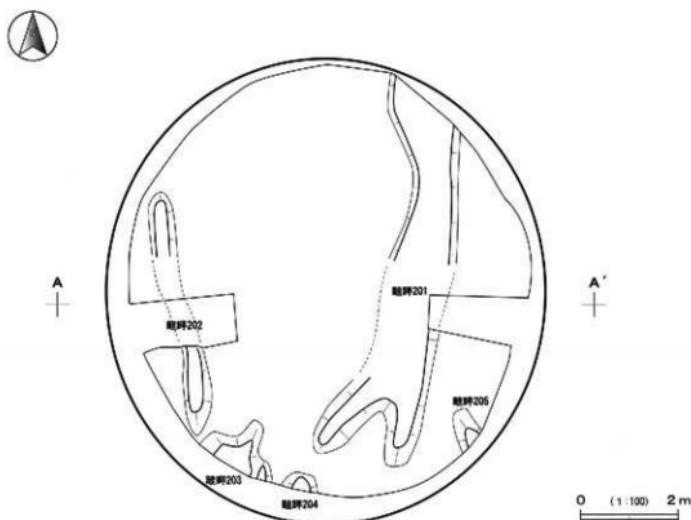
遺構名	形状		法量 (m)		埋土
	平面	断面	径・幅	深さ	
S K 101	円形	浅い皿形	1.2	0.14	暗褐色礫混粘土
S K 102	円形	浅い皿形	0.8	0.12	暗褐色礫混粘土
S K 103	方形（北に溝状の突出部）	浅い皿形	1.2 × 1.7	0.12	暗褐色礫混粘土
S P 104	東西に長い楕円形	椭形	0.3	0.15	灰黄色土
S P 105	東西に長い楕円形	浅い皿形	0.7	0.08	暗褐色シルト混疊
S P 106	南北に長い楕円形	浅い皿形	0.6	0.06	暗褐色シルト混疊
S P 107	南北に長い楕円形	浅い皿形	0.7	0.1	暗褐色シルト混疊
S P 108	南北に長い楕円形	二段掘り	0.6	0.15	暗褐色礫混粘土
S P 109	円形	浅い皿形	0.4	0.08	暗褐色シルト混疊
S P 110	円形	浅い皿形	0.35	0.06	暗褐色シルト混疊
S P 111	東西に長い楕円形	浅い皿形	0.6	0.1	暗褐色シルト混疊
S P 112	円形	二段掘り	0.3	0.06	暗褐色礫混粘土
S P 113	ひょうたん形	浅い皿形	0.4	0.1	暗褐色シルト混疊
S P 114	円形	椭形	0.4	0.13	灰黄色シルト
S P 115	円形	二段掘り	0.45	0.08	暗褐色シルト混疊 灰黄色シルト
S P 116	東西に長い楕円形	浅い皿形	0.75	0.15	暗褐色シルト混疊
S P 117	円形	浅い皿形	0.5	0.08	暗褐色シルト混疊・黄褐色土質シルトのブロック
S P 118	東西に長い楕円形	二段掘り	0.5	0.15	暗褐色シルト混疊
S P 119	円形	浅い皿形	0.5	0.07	暗褐色シルト混疊
S P 120	円形	椭形	0.35	0.08	暗褐色シルト混疊
S D 121	東東～北西に伸びる	逆台形	幅0.2	0.07	暗褐色シルト混疊
S D 122	ほぼ南北に伸びる	逆台形	幅0.4	0.05	暗褐色シルト
畦畔 201	ほぼ南北に伸びる、両端は分岐する	台形	幅0.9～1.6	0.1	—
畦畔 202	ほぼ南北に伸びる	台形～半球形	幅0.5～0.7	0.05	—
畦畔 203	北端のみ検出	台形～半球形	幅1.8	0.04	—
畦畔 204	北端のみ検出	台形～半球形	幅0.8	0.1	—
畦畔 205	北端のみ検出	台形～半球形	幅0.7	0.03	—
S P 301	東西に長い楕円形？	浅い皿形	径0.4	0.05	褐色粘土質シルト
S P 302	東西に長い楕円形	浅い皿形	1.1	0.08	褐色粘土質シルト
S D 303	ほぼ東西に伸びる	浅い皿形	0.5	0.04	暗青灰色粘土質シルト
S D 304	西西～北東に伸びる	椭形	0.7	0.15	黒褐色粘土質シルト
N R 401	南北～北東に伸びる	—	—	0.3以上	灰色粗粒砂・植物遺体の瓦層
S K 501	円形？北部は未検出	浅い皿形	1.3	0.1	暗灰色礫混粘土質シルト
S K 502	北端のみ検出	椭形	1.6 × 0.3	0.15以上	黑灰色礫混粘土質シルト
S P 503	南北に長い楕円形	椭形	径0.4以上	0.05	暗灰色礫混粘土質シルト
S P 504	南北に長い楕円形、南に突出部を持つ	椭形	0.65	0.1	黑灰色礫混粘土質シルト
S D 505	東東～北西に伸びる	浅い皿形	幅0.15	0.05	黑灰色礫混粘土質シルト
S D 506	東東～西南西に伸びる	浅い皿形	幅0.6	0.05	暗灰色礫混粘土質シルト
S D 507	東北～南西に伸びる	浅い皿形	幅0.3	0.05	暗灰色礫混粘土質シルト

### 3.まとめ

今回の調査では、6枚の遺構面を検出することができた。遺物は極少量出土したのみで、遺構の時期は明確にはできないが、既往調査の結果から、第1面は弥生時代後期～古墳時代中期頃、第2面は弥生時代前～中期、第4面・第5面が縄文時代、第6面が旧石器時代に対応するものと考えられる。また、第1面・第5面は集落の中心部・居住域にあたるものと考えられ、当遺跡の南西部の実態が明らかになったといえる。

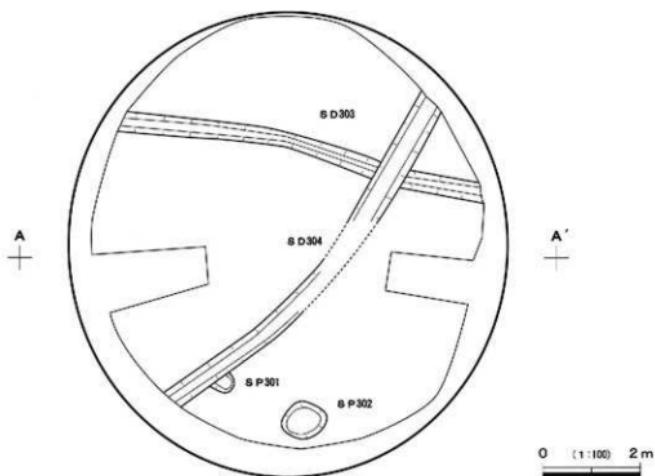


### 第5図 第1面平面図



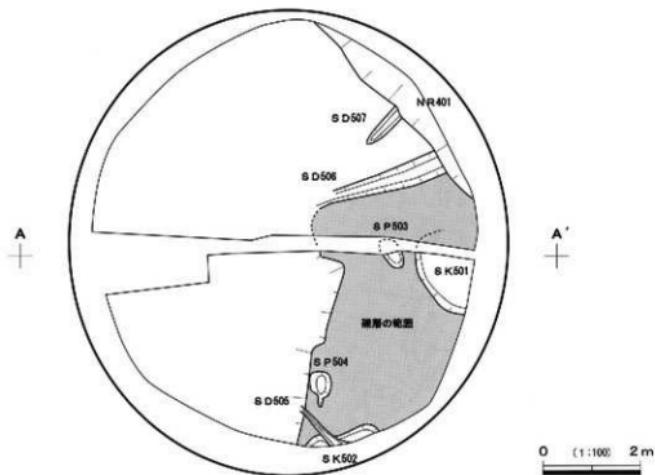
### 第6図 第2面平面図

(A)



第7図 第3面平面図

(A)



第8図 第4面・第5面平面図



調査地近景(北東から)



南区機械掘削状況(南東から)



南区第1面精査(南西から)



北区第1面遠構掘削状況(東から)



南区第1面東部遺構検出状況(南西から)



北区第1面全景(西から)



南区第1面全景(南西から)



北区第1面全景(東から)



南区第2面遺構掘削状況(南西から)



北区第2面遺構掘削状況(東から)



南区第2面全景(南西から)



北区第2面全景(南東から)



南区第3面遺構掘削状況(南東から)



北区第3面遺構掘削状況(東から)



南区第3面全景(南西から)



北区第3面全景(東から)



南区第4面精査造構掘削状況(南東から)



北区第4面・第5面造構掘削状況(南東から)



南区第5面造構掘削状況(北東から)



北区第2面全景(南東から)



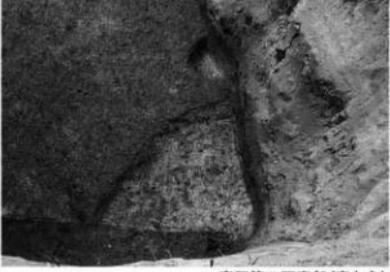
南区第5面全景(北西から)



南区第5面全景(東から)

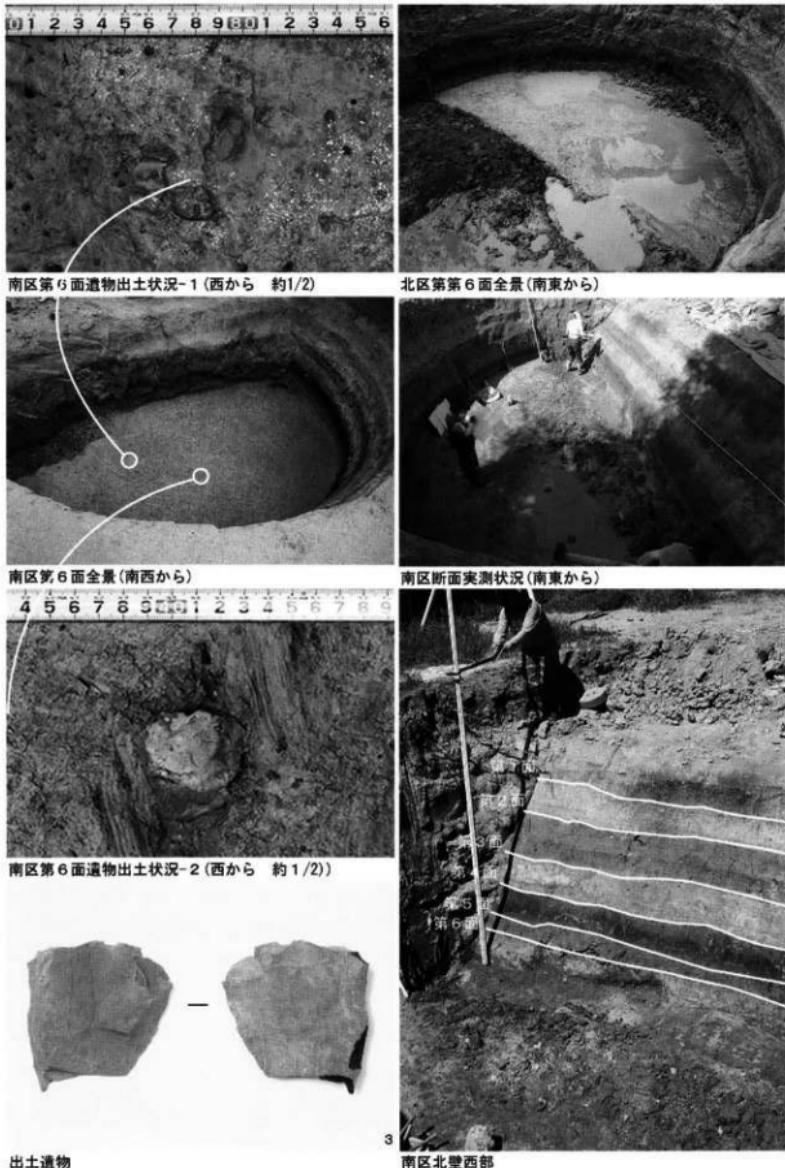


南区第5面南部(南から)



南区第5面東部(東から)

図版  
4



出土遺物

### III 八尾南遺跡第33次調査(Y S 2009-33)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市西木の本四丁目地内で、市営大正住宅周辺道路整備(下水道)に伴い実施した八尾南遺跡第33次調査(Y S 2009-33)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 西村公助が担当した。
1. 現地調査は、平成21年9月17日に着手し、10月21日に終了した(外業実働2日)。調査面積は約8m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査には、岩本順子・村井俊子・村田知子の参加を得た。
1. 内業整理は現地調査終了後に着手して平成22年3月をもって終了した。  
　　遺物実測・トレースー市森千恵子
1. 本書の執筆・編集は西村が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	19
2.調査概要.....	21
1) 調査方法と経過.....	21
2) 基本層序.....	21
3) 検出遺構と出土遺物.....	22
3.まとめ.....	23

### III 八尾南遺跡第33次調査(Y S 2009-33)

#### 1.はじめに

八尾南遺跡は大阪府八尾市南西部に位置している。現在の行政区画では若林町1~3丁目、木の本1~4丁目の西部にあたり、東西約0.5km、南北約1.3kmがその範囲とされている。

地理的には旧大和川及びその支流河川による活発な沖積作用によって形成された河内平野の南西部にあたる。地質的には概ね冲積地であるが、遺跡の南には羽曳野丘陵から連なる河内台地が、西には上町台地が存在しており、台地から低地への地形変化点にもなっている。

周辺には、北東に木の本遺跡、南東に太田遺跡、市境を挟んで北部から西部にかけては長原遺跡等の遺跡が隣接している。当遺跡は、長原遺跡で行われた地下鉄建設が発見の契機になっており、これを受け行われた八尾南遺跡調査会による発掘調査が端緒となっている。調査の結果、当遺跡が旧石器時代～中世にかけての複合遺跡であることが明らかとなり、その後、八尾南駅南側を中心に大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって継続的に発掘調査が行われている。

今回の調査地は遺跡北部にあたり、調査地近辺では、南西側の八尾南遺跡第26・27・28・30・31次調査、北西側の第18次調査、東側の第7次調査で、古墳時代～近代までの居住域や生産域に関連する遺構が検出されている。このような既往の調査から、今回の調査地では古墳時代から近世にかけての居住域や生産域に関連する遺構・遺物の存在が想定された。

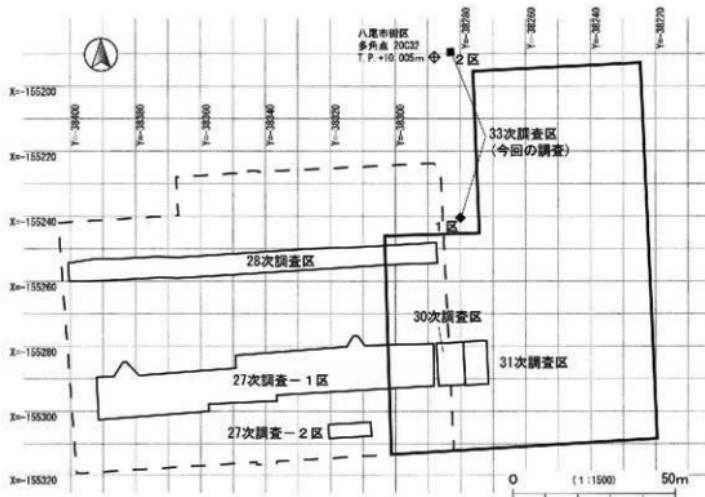


第1図 調査位置図

第1表 調査地一覧表(第1図に対応)

番号	調査名(年号)	調査範囲	面積(㎡)	種別	主な時代	文 献
1	八尾東第3次 (Y584-23)	八丈浦	906	生糞域・糞堆域 牛糞域	古墳時代 平安時代	酒井昌則 1985 「Ⅱ.八尾東遺跡(第3次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告6』
2	八尾東第6次 (Y586-17)	八丈浦	126	糞堆域	古墳時代～奈良時代	酒井昌則 1987 「Ⅳ.八尾東遺跡(第6次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告14』
3	八尾東第7次 (Y586-17)	八丈浦	3043	生糞域	古墳時代 平安時代～鎌倉時代	酒井昌則 1987 「Ⅴ.八尾東遺跡(第7次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告14』
4	八尾東第13次 (Y587-16)	八丈浦	696	糞堆域・糞作域 牛糞域	古墳時代 平安時代	酒井昌則 1988 「第12.八尾東遺跡(第13次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告16』
5	八尾南第18次 (Y588-16)	八丈浦	362	居住域	古墳時代	原田昌臣 2008 『八尾南遺跡第18次発掘調査報告書』八尾市文化財調査研究会報告28
6	八尾南第19次 (Y588-16)	八丈浦	700	?	弥生時代 古墳時代	西村公勝 1994 「Ⅲ.八尾南遺跡(第19次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告43』
7	八尾南第26次 (Y590-26)	八丈浦	50	生糞域 牛糞域	古墳時代 平安時代	高木千秋 2006 「Ⅲ.八尾南遺跡(第26次調査)」『(財)八尾市立琵琶文化財調査センター報告6』
8	八尾南第27次 (Y590-27)	八丈浦	1419	?	牛糞域	高木千秋 2007 『八尾南遺跡(第27次調査)』八尾市文化財調査研究会報告162
9	八尾南第28次 (Y590-28)	八丈浦	723	新住域 生糞域 河道	豊丘時代～平安時代 平安時代～平安時代	成瀬千子 2007 『八尾南遺跡(第28次調査)』八尾市文化財調査研究会報告114
10	八尾南第30次 (Y590-30)	八丈浦	103	?	古墳時代 平安時代～古墳時代	米川友美 2008 『八尾南遺跡第30次調査』八尾市文化財調査研究会報告121
11	長尾道路 (NG82-26)	大丈浦	-	河渠 牛糞域	古墳時代	1982 「近畿財務局公務員宿舎に伝る古墳跡跡発掘調査(NG82-26)報告」
12	八尾南遺跡 糞堆発掘記録	市教委	190	?	古墳時代 平安時代	細谷敏也 1981 「八尾南遺跡糞堆発掘記録」『八尾南道路・東郷遺跡発掘調査委員会報告』八尾市文化財調査報告6
13	八尾南遺跡	市教委	-	-	-	日向敬季 1983 『八尾南遺跡文化財発掘調査 1980-1981 年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告2』
14	八尾南第31次 (Y590-31)	八丈浦	86	古墳河床 生糞域 牛糞域 牛糞域	古墳時代以前 古墳時代～平安時代 平安時代～中世 近江～古墳時代	井岸友美 2009 「Ⅲ.八尾南遺跡第31次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告128 (財)八尾市文化財調査研究会報告
15	八尾東第33次 (Y590-33)	八丈浦	4	糞堆域 生糞域 牛糞域 牛糞域	古墳時代中期 古墳時代後期～奈良時代 奈良時代～平安時代	今野の調査

※調査機関：(財)八尾市文化財調査研究会 市教委：八尾市教育委員会 大丈浦：(財)大阪市文化財調査研究会



第2図 調査区位置図

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は市営大正住宅周辺道路整備(下水道)に伴う調査で、当調査研究会が八尾南遺跡内で行った第33次調査である。

調査は下水道工事の人造部分(2m × 2m面積4m<sup>2</sup>)の2箇所を対象に実施し、合計面積は約8.0m<sup>2</sup>を測る。調査は盛土が存在する深さの地表下0.8~1.1m前後は機械で掘削を行い、以下約1.0mの範囲は人力と機械を併用して調査を行った。

地区割については調査地西側で当研究会が行った八尾南第27次調査で使用した地区割を東部に延長する方法を取った。座標は国土座標第VI系(新座標:世界測地系)を使用し、標高はT.P.値【八尾市街区多角点20C32(調査地西約3m地点:T.P.+10.005m)】を使用した。

### 2) 基本層序

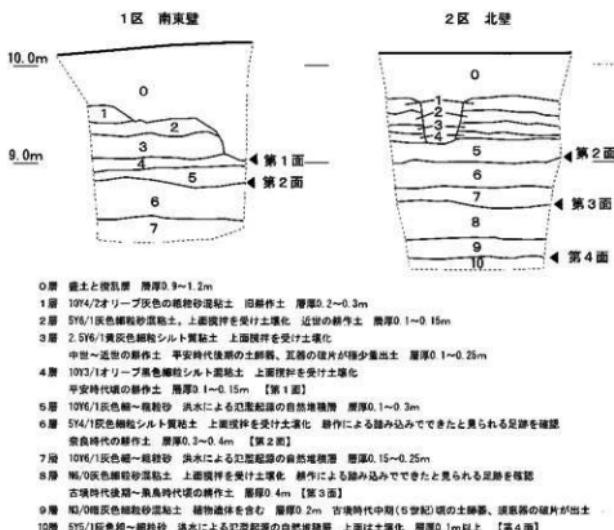
現地表下0.9~1.2m前後までは水道管・ガス管などが設置されて搅乱を受けたため、1区では南東壁、2区では北壁で断面観察を行ない、基本の層位として10層を確認した。

0層 盛土と擾乱層。層厚は約0.9~1.2mを測る。

1層 10Y4/2オリーブ灰色の粗粒砂混粘土。旧耕作土。層厚は約0.2~0.3mを測る。

2層 5Y6/1灰色細粒砂混粘土。上面は搅拌を受け土壤化しており、近世の耕作土に比定できる。

層厚は約0.1~0.15mを測る。



第3図 1・2区 (S=1/50)

- 3層** 2.5Y6/1 黄灰色細粒シルト質粘土。上面は搅拌を受け土壤化しており、中世～近世の耕作土に比定できる。層内からは平安時代後期の土師器、瓦器の破片が極少量出土した。層厚は約0.1～0.25mを測る。
- 4層** 10Y3/1 オリーブ黒色細粒シルト混粘土。上面は搅拌を受け土壤化しており、平安時代頃の耕作土に比定できる。層厚は約0.1～0.15mを測る。上面は第1面。
- 5層** 10Y6/1 灰色細～粗粒砂。洪水による氾濫起源の自然堆積層。層厚は約0.1～0.3mを測る。
- 6層** 5Y4/1 灰色細粒シルト質粘土。上面は搅拌を受け土壤化しており、耕作による踏み込みでできたと見られる足跡を確認した。奈良時代の耕作土に比定できる。層厚は約0.3～0.4mを測る。上面は第2面。
- 7層** 10Y6/1 灰色細～粗粒砂。洪水による氾濫起源の自然堆積層。層厚は約0.15～0.25mを測る。
- 8層** N6/0 灰色細粒砂混粘土。上面は搅拌を受け土壤化しており、耕作による踏み込みでできたと見られる足跡を確認した。古墳時代後期～飛鳥時代頃の耕作土に比定できる。層厚は約0.4mを測る。上面は第3面。
- 9層** N3/0 暗灰色細粒砂混粘土で、植物遺体を含む。層厚は約0.2mを測る。古墳時代中期(5世紀)頃の土師器、須恵器の破片が出土した。
- 10層** 5Y5/1 灰色粗～細粒砂の洪水による氾濫起源の自然堆積層。上面は土壤化している。層厚は約0.1m以上を測る。上面は第4面。

### 3) 検出遺構と出土遺物

#### 〈第1面〉

上面の標高は T.P. + 9.1～9.3m で、搅拌を受け土壤化している。平安時代頃の耕作土に比定できる。

#### 〈第2面〉

上面の標高は T.P. + 8.8～9.1m で、上面は搅拌を受け土壤化しており、耕作に伴う踏み込みが多数見られた。奈良時代の耕作土に比定できる。

#### 〈第3面〉

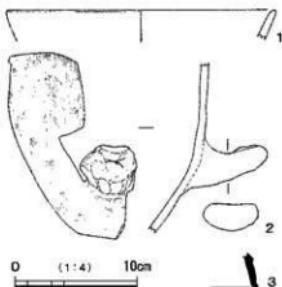
上面の標高は T.P. + 8.6m で、上面は搅拌を受け土壤化しており、耕作に伴う踏み込みが多数見られた。古墳時代後期～飛鳥時代頃の耕作土に比定できる。

#### 〈第4面〉

上面の標高は T.P. + 8.0m である。9層内には古墳時代中期(5世紀前半頃)の土師器の瓶と思われる破片や、須恵器の杯蓋の破片が出土していることから、当層上面で遺構が検出できると予想されたが、遺構の検出はなかった。

#### 9層出土遺物

1・2は土師器瓶で、同一個体と考えられる。体部は直立して伸び、口縁部はやや外側に広がる。牛角状の把手が取り付く。口縁部は内面ヨコナデ、外面ハケナデのちヨコ



第4図 出土遺物実測図

ナデを施す。体部は内面ヘラケズリ、外面ハケナデを施す。把手部はユビナデを施す。3は須恵器杯蓋である。これらは古墳時代中期に比定される。

### 3.まとめ

今回の調査では、古墳時代から近世に至るまでの4面の遺構面を検出し、遺物はコンテナ1箱分が出土した。

第1～3面は、古墳時代後期～平安時代の耕作面が存在していたことが判った。これらの耕作面は周辺の第7・30次調査(西村 1993 米井 2009)でも検出していることから、当調査地付近一帯に生産域が広がっていたことが明らかになった。

第4面では、遺構の検出はなかった。しかし、上部の9層を古墳時代中期(5世紀前半頃)の遺構の埋土と考えると、2区全体が同時期の遺構であった可能性が高い。同時期の遺構は第18次調査(原田 2008)で多数検出しており、居住域の東への広がりを確認できる結果を得ることができた。



調査地周辺(北から)



1区 挖削状況(南から)



2区 挖削状況(西から)



# 報告書抄録

ふりがな	I. こざかあいいせき(だい 43 じちょうさ) III. やおみなみいせき(だい 33 じちょうさ)	II. やおみなみいせき(だい 32 じちょうさ)
書名	I 小阪合遺跡(第43次調査) II 八尾南遺跡(第32次調査) III 八尾南遺跡(第33次調査)	
副書名		
巻次		
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告	
シリーズ番号	131	
著者名	I 坪田真一・Ⅱ成海伸子 Ⅲ西村公助	
発行機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会	
所在地	〒 581 - 0821 大阪府八尾市寺町四丁目 58 - 2 TEL・FAX 072 - 991 - 4700	
発行年月日	西暦 2010 年 3 月 31 日	

所 収 遺 跡	所 収 地	コ ード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査 原因
		古町村	遺跡番号					
こざかあいいせき 小阪合遺跡 (第43次調査)	おおさかふやおしむかみこざかあいちょう1ちょうめ 大阪府八尾市南小阪合町一丁目	27212	40	34 度 37 分 29 秒	135 度 36 分 45 秒	2009/10/1 ~ 2009/11/27	約 50	防火水槽築造工事
やおみなみいせき 八尾南遺跡 (第32次調査)	おおさかふやおしむかばやしちょう3ちょうめちない 大阪府八尾市若林町三丁目地内	27212	67	34 度 35 分 41 秒	135 度 31 分 48 秒	2009/9/10 ~ 2009/11/27	約 50	防火水槽築造工事
やおみなみいせき 八尾南遺跡 (第33次調査)	おおさかふやおしにしきのじょくちょうめちない 大阪府八尾市西木の本四丁目地内	27212	67	34 度 36 分 01 秒	135 度 34 分 57 秒	2009/9/17 ~ 2009/10/21	約 8	市営大正住宅園道整備工事(下水道)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
小阪合遺跡 (第43次調査)	集落	中世	耕作溝・自然河川	土師器・須恵器・瓦器・中國製磁器	
八尾南遺跡 (第32次調査)	集落	旧石器時代 縄文時代 弥生時代前期～中期 弥生時代後期～古墳時代中期	地層 上坑・小穴・溝 水田 土坑・小穴・溝	サヌカイト剥片 縄文土器	
八尾南遺跡 (第33次調査)	集落	古墳時代中期 古墳時代後期～平安時代	遺物包含層 近世：耕作土層	土師器・須恵器	

要 約	小阪合遺跡第43次調査では中世頃に堆積した自然河川を確認した。八尾南遺跡第32次調査では、旧石器時代から古墳時代中期にわたる地層や遺構を、また第33次調査では、古墳時代中期～平安時代の集落城を確認した。
-----	---

(財)八尾市文化財調査研究会報告131

- I 小阪合遺跡 (第43次調査)
- II 八尾南遺跡 (第32次調査)
- III 八尾南遺跡 (第33次調査)

発行 2010年3月31日  
編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会  
〒581-0821  
大阪府八尾市幸町四丁目58番地2  
TEL・FAX 072-994-4700

印刷  
株式会社セントラル  
表紙 レザック66 <260Kg>  
本文 ニューエイジ <70Kg>  
図版 ニューエイジ <70Kg>

